山梨医大紀要　第1巻, 30－37(1984)

アリストテレスの生命論の構想
―― ひとつのスケッチ ――

川田　殖

従来の哲学史がアリストテレスの哲学概念によって支配されてきたように、アリストテレス解釈もまた哲学史の脈絡の中でなされてきた。しかしアリストテレスをそれ自体として読む時、その著作中に占める分量とその内容から見て、従来哲学者によって余り重視されなかった自然学ことに生物学的著作の重要性に気づかされる。本稿はその学問的態度、論理、心魂論、自然学、存在論、倫理学、政治学および創作論のうちに見出される生物学的・生命論的発想に着目してアリストテレス哲学の全体像を新しく見直し、あわせてこんにちにおける生命論への示唆を見出そうとするものである。

キーワード：　哲学、生命理論、アリストテレス

1

アリストテレスがギリシアの生んだ大哲学者であり、学問の開拓者であることを知らない人はないが、彼が医家の出身であり、その思考の範型 (paradeigma) が生物にあるということに注目する人は比較的少いのではないか。むろん彼は16才の時故郷スタゲイラを出てアカデメイアに入り、20年間プラトンの弟子として研鑽をつづけたのであるから、彼の学問に消すことのできないプラトン的思考が残っていることはいうまでもない。素材 (hylē) よりも形相 (eidos) を優先させる考え方、人間の感覚よりも知性を重んずる考え方、また生物の中で人間をその知性のゆえに優越したものと考える考え方などはプラトンと共通した特長であるということができるであろう。しかしそのとり上げ方には微妙な相違があってそこにアリストテレスの真面目が現われているとも考えられる。たとえば(1)形相の優先ということについても、彼はあくまでも個々の事物・現象を着実に観察し、その限りにおいてそれを成立させている要素・素材にも十分な配慮を加えつつ、他との類同性・相違性を確定し、類似物さらには相違物の中でのその個物の位置づけを行っつている。(これが他との関係に着目してなされる際には分類の根拠となり、そのものの構成要素の分析に着目してなされる際には素材と形相、さらには形相と形相相互、のつながり方の確認の根拠となるわけである。) 形相はアリストテレスにおいてはこのように素材をまとめて個物たらしめている秩序づけの原理なのである。また(2)知性の重視という点についても、彼はプラトンが行ったように感覚を消極的否定的に評価することなく、むしろある意味ではあらゆる認識は感覚的認識から出発するとしてこれを積極的肯定的に評価し、感覚を基礎としてこれを吟味批判するところに知性の実現を見ることができるとした。『形而上学』冒頭[1]に感覚・記憶・経験・学問的知識といった順序でのべられている認識の展開はそれを典型的に示しているといえる。理論が紛糾してくるとほとんど必らずといっていいほど観察に基く具体的実例に訴えて当面の問題を解決しているところに彼の学問的態度の特長が窺える。そしてこのような彼の態度は彼以前のギリシア哲学者たちの、原理となるものをまず立てて、そこから万物を説明し、あらゆる現象をそこへ還元しようとする態度と対照的である。それは一つのまとまりを持った個々の事物の事例をあらゆる角度からまずよく観察し、これに照らして原理をたえず反省吟味するというあり方 ――あえて標語化すれば前者の還元主義的 (reductive) なあり方に対して統合主義的

山梨医科大学哲学・倫理学
(受　付：昭和59年9月20日)

（comprehensive）な態度――へと具体化されている。そしてアリストテレスのこのような態度の背後には冒頭にのべた彼の医者的・生物学的態度が大きく働いているように思われるのである。

2

形相や知性というプラトン哲学の遺産の処理においてよりもアリストテレス的思考がもっとよく表われているのは可能（dynamis）と現実（energeia）という彼独自の対概念においてである[2]。世界を動くものと捉えたイオニア哲学の伝統が、同一性論理を徹底させて存在を静的に捉えることになったエレア派の主張によってその歩みを阻止されて以来、論理によって動をいかに捉えるかということはギリシアの哲学においてまさに中心問題であった。しかし論理よりも存在を優先させたアリストテレスにとっては、論理は存在を理解するための道具（organon）であった。そこでは名辞（onoma）や類（genos）や種（eidos）が存在に明確に対応しているか、命題や論証が存在の真相に合致しているかがつねに問われていた[3]。これは彼の論理がのちの形式論理といわれるようになったものと大いに異なったものであることを示している。そして範疇や命題、推論や論証が事象をいわば不動のものとして共時的（synchronique）[4]に扱うのに対して事象を運動変化の中で通時的（diachronique）[4]にとり上げるために採用されたのが上記可能と現実――秩序意識をつけ加えれば未完成と完成――という概念だったと考えられる。

これは事象を分析してその構造を明らかにするためにプラトンが導入した分割法（diaireris）とともに、ギリシアにおける存在理解の二大方式ともいえる画期的な着眼点であるが、アリストテレスはこれを独立した方法とせずに、さきの分類、構造分析に用いられた範疇・命題・論証の論理装置と結びつけ、動の一部として静を捉える工夫がなされている。のちにそれぞれ分析論理、弁証法といわれるようになった論理形態がここではそれぞれの用途に応じて、一つの生命体を理解する道具として用いられている。のちに自然の論理、歴史の論理というふうに二分されるようになった上記二つの論理形態が、ここではいわば生命の論理として一つに結びついているのである。われわれはここにプラトンの弟子としてその存在理解の中心であったイデア論を独自の生物学的自然観の視座からうけとるとともに、また何よりも生命体としての生物を正確に把握説明することのできる論理形態を探索したアリストテレスの姿勢を見ることができると思う。

3

学問方法論におけるアリストテレスのこのような構築の特色は、プラトンが最大の関心を払った心魂（psychē）の扱い方にいっそう顕著に見られる。心魂を肉体と峻別してその働きを対比的に捉え、人間的生の重点をもっぱら前者においたプラトン[5]は先師ソクラテスが生死を賭けて証した心魂の重みという事実を形而上学化したとも考えられるが、アリストテレスは師プラトンによって生命原理にまで徹底された心魂の概念をさらに拡げ、生きとし生けるものの生のあらゆる側面に滲透しているものとした。それゆえ心魂はアリストテレスにとっては、栄養摂取（代謝・生長・再生）、生殖（複製）などの植物的レベルにすでに含まれる生命機能から、場所的移動、感覚・感情などの動物的レベルに含まれる生命機能を経て、記憶・経験・知識・選択決断などの人間固有の生命機能に至る、凡ゆる生命機能を包括している[6]。それはこんにちにおける生物学、心理学、認識論、さらには倫理学の或る部分までも含む広般な研究対象に相当する。しかもその心魂の働きが単に分類整理されてあるだけでなく、生きた動的連続の中で考えられていることは、彼が心魂の定義として与えた「生命を持つ可能性のある自然物の第一の完全現実態」[7]という表現の中にも明らかである。われわれはこの簡明な規定の中にアリストテレスの生命観の広がりとその動態的把握とをともに見ることができる。

このような広般かつ動的な生命観をもったアリストテレスにとって、ソクラテスやプラトンが信奉したといわるる魂の不死は一つのパラドックスむしろスキャンダルとも受けとられたかも知れない。しかし若き日そのプラトンの思想の崇高さに魅せられた彼は、これを無下に放棄することをせず、できるだけ非神話化して、おのれの学の枠のうちでの理解を試みたらしい。『デ・アニマ』末尾のいわゆる受動理性（nous pathētikos）――その機能を究極的には他に仰ぐ知性――に関連して、passive なものは active なものがあればこそだとして、能動理性（nous poiētikos）の存在を示唆しているように見えるところがそれである[8]。しかし彼はこれについて特に積極的な論証を与えてはいない。この事態をどう受けと

るかは古来のアリストテレス解釈の難問の一つであるが、――中世紀にはしばしば神と等置された――この形而上学的存在を、内心ひそかに望見しつつ、しかし実証的な枠内に発言を控える、彼の学問的節制の表われと筆者は解釈したい。

4

しかし能動理性を構想することは自然的世界を生きた世界と考えた古代ギリシア人であるアリストテレスにとってはそれほど困難でなかったかも知れない。そもそも自然の原語にあたるピュシス（physis）は元来事物の構成とともにまた生成・成長をも含んだ言葉である。このことは水という言葉で「生命の水」を含意したミレトス派のタレスから、宇宙を一つの「完全な生物[9]」と呼んだプラトンに至るまで連綿たる伝統をなしており、その脈絡から見ればデモクリトスの原子論は一つの逸脱ともいえるのである。アリストテレスが自然物を「自分のうちに動と静の始原を含む存在[10]」と規定したのは特別に変ったこととも考えられないのである。この目から見ればいわゆる火風水土も生きたものであり、自分の固有の場所に動き行く力を持つとともに、また他を動かし生かす力を持っている。永遠の自発運動をなすと考えられた天体は、より完全な自然として、神的とさえ考えられた。彼にとって神とは動と生命の始原的存在だったからである。そして心魂は根源的にはこの神的存在につながり、それが自然のうちに種々の形態・機能を具えつつ遍在していると考えられる。自然の核心はこのような生命原理としての心魂にあるとされるのである。

これに対して生命をもたぬものの代表は人工物である。家や寝椅子の例がよく引合いに出されるが、しかしこれらは元来木の下、洞穴などや草の褥を模倣したものであるように、人工物をつくる技術（technē）は、自然の模倣を出発点とし、その完成を目的としている[11]。そして技術によって人工物が出来るためには目的（hou heneka）・形相（eidos）・材料（ex hou）・動力（dynamis）がなければならぬように、自然物の生成にもこれが必要とされると考えられるのである。これらの諸要因は思想史的にはすでに古代ギリシアの先行哲学者たちによって個別的に発見提唱されていたものであるが、自然物と人工物とを対比考察しながら、これらが両者に含まれていることを洞察したのはアリストテレスの功積である。このような見地から彼はいわゆる自然の合目的性を自然現象・生命現象の随所に指摘している[12]。事物ことに生物が出来上るためには上記要因のどれかが一つだけあればよいという単純なものではないのである。上記要因はこんにちの言葉でいえばそれぞれ機能（function）・構造（structure）・要素（factor）・力（energy）とでも言いうるものであって、これらは自然を生物的パラダイムで考える時極めて容易に理解されるものである。いわゆる原子論的思考といわれるもの、また唯物論（materialism）といわれるものも、これら生物体のうちに含まれる素材的な側面をのみ強調したものに過ぎないとも考えられてくる。アリストテレスの目は、こんにちのいわゆる分析主義、すなわち自然を素材へと分解して行くことを主眼とする態度を超えて、自然を真に自然として見るには、素材をその一部として含みつつ、同時に構造、力、目的をも包括するような全体的・綜合的（holistic, comprehensive）な視野が必要であることを洞察しているのではないか。

5

彼の存在論の核心をなす実体（ousia）というものも、以上のような生物学的な具体物をモデルとして考える時、いっそうよく理解できるであろう。それをいきなり形相と素材の合成物として公式的に理解するのではなく、ものを見る際にまず健全な感覚にとって疑いえない具体的個物としてそれを見るところから出発しなければならぬ。その時それは素材の塊りと見えるかも知れぬ。しかもそれは感覚をもって捉える限り、単なる表層的認識の対象としてたえず浮動的流動的である。これを一定のものとして捉えるにはそのような一時的浮動現象の個別相に迷わされることなく、その基底に存在する確固不動の真面目の発現の相に着目しなければならぬ。これが形相といわれるものである。そしてこれを捉えるためにはこれを知る主体も単に感覚を用いるにとどまることなく、それの蓄積によって形づくられる経験をさらに吟味反省して、事物の真相を捉える知性認識の主体へと深まらざるをえない。アリストテレス『形而上学』第6―8の諸巻はこのような真実在探求のいくつかの試みとそれに対する吟味反省のドキュメントである。それは動物学の広般な調査研究をも含む自然の粘り強い考察の裏づけをもち、まさにメタ・自然学（metaphysica）といわれる性格をもっ

ている。しかもそこにおける実体の最終規定とも見られる「ある特定の具体的個物をそのものたらしめる要因としての形相[13]」という言葉も真に究極的たるにはなお遠く、われわれ自身ここに示された本質追求の努力をさらに推進して行くべく促がされるのである。

このようなアリストテレスの実体探求の歩みを辿って行くとき、私たちにいやおうなく感ぜられることは、そのしぶといまでの観察と吟味との積み重ねである。それは単に自然の事象に対してのみならず、先行研究者の見解主張に対してもなされている。われわれはその煩雑さ細かさにしばしば巻を投げ出したくなるような衝動にさえかられる。しかしなおそれに耐えてその粘り強い問と答、またその吟味を辿る時、われわれはいつしかそれがプラトン後期の対話篇、ことに論理的色彩の濃い『パルメニデス』『ソフィスト』『政治家』『ピレボス』などの諸篇に展開されている探求の消息に通うもののあることに気づく。こう見てくるとアリストテレスの学問的方法もまた、事実や見解の厳密綿密な観察をおのが課題ととらえて、これを吟味し真相を発見して行く対話のいとなみにほかならぬことに思いいたらざるを得ない。観察や吟味はあくまでこのような対話の一要素なのである。そしてこのような対話は対象の真相をいっそう明確にするとともに、また主体の精神をいっそう柔軟強靱にし、対象のうちにある動的生命をおのがうちに観察することを可能にさせる。このような心眼にとってのみ実在はその真相の全貌を明らかにするのであろう。その時いちいちの観察事象はその全面的真理を断片的にさし示す要素として位置づけられることになる。彼にとってこのような生命の全貌が明らかになることこそその最終目標なのである。彼は――ある種の神秘主義者・直観主義者が行ったように――一足とびに対象の中に没入することをせず、あくまで綿密に着実にいちいちの事象にとり組んでやまない。しかしその過程に垣間見られる生命の断片的ひらめきは彼の心に生命のより大いなる拡がりを確信させ、これを求める勇気を彼に与えたのではないか。個物はその時全体を表わす象徴となる。彼の実体というものにはこのような側面があったと考えられる。単なる全体、事象の一面的集成だけが尊いのではない。個物を見つめる全体的視野・綜合的視点もまたそれに劣らず大切なのである。

6

以上に見たように自然には本性的働きがあり、生物はいうに及ばず、火風水土のごときさえもさきに見たような本性的運動の方向を持っているとアリストテレスは考えた。しかし自己に本来（本性的に）具わった特性・固有性を自覚的計画的に発揮させるのは意志と知性を具えた人間の特性であり、ここに単なる自然学では扱いきれない実践の領域に属する問題がある。この人間本来のあり方の個人に即した考察がエートスの学（ēthikē 倫理学）[14]であり、共同体に即した考察がポリスの学（politikē 政治学）[15]となる。両者はともに人間の学として広義の倫理学・実践哲学に属するとされるのである。ここから明らかなことはアリストテレスの実践哲学が理性的動物（to zōon logon echon）としての人間性把握の上に立っていて、あくまでもその生命の本質的機能の発揮に主眼点があるということである。こうして彼は人間における理性の働きを観察考察し、その本性に即して現実を改変し、計画立案し、現実を本性に叶ったあり方（真実に即したあり方）に高めて行くというところに、人間の自然本性の発揮、機能の実現、目的の完成への努力を位置づける。それは現実をそのまま完成態とする自然主義でもなく、また外からの規制、習慣をそのままうけ入れるという他律的道徳主義のいずれでもない。それは人間生命の真相に即した実践の意義把握であって、アリストテレスの実践哲学はその生命論、存在論の上にこれと密接不離の所で築かれているのである。

それゆえにこの領域を扱う論理も対象の特長に即して蓋然的（hos epi to poly 大体にあてはまる）[16]というあり方を大幅に認め、種々の人間行動の観察を通してその内的構造を探り、従来徳目とされていたものもこの人間存在の根本構造・その本性的働きのうちに新しく位置づけられ吟味されている。そしてプラトンが哲人王の養成の目標とした善のイデアの認識は、実践生活の多様性とその実情から見て、これを倫理学に求むべきでないとされている[17]。むしろ医者が健康を扱う場合同様[18]、おのれの本性的あり方に即した選択決断を重ねつつ、個々の人間的善を選んで行く過程の行手にこそほの見えるものであることを示唆している。そしてその際の目安となるものこそ人間に固有とされた知性能力の発揮なのである。こうして人間の幸福は、善そのものの所有よりも、本性

的機能の発揮に重点がおかれ、人間としての立派さに叶った魂の活動（psychēs energeia kat' aretēn）[19]とされている。

こうしてプラトンにおいても中心的意味をもつ正義論もこのような態度で着実な分析が試みられ、配分的正義と矯正的正義という、以後の正義論に決定的となった概念がここに呈示される[20]。そしてこれはさらに友愛（philia）論に進んで共同体への志向を示しているのである[21]。そしてそれらを含んだ徳性一般について、アリストテレスは、それが知にほかならないと論じたソクラテス・プラトンの見解をふまえながら、これが人間本性に根ざしたものであるとの見地から、「徳性(arete)とは…道理に基いて定められ，思慮を具えた人びとによっても承認されるような、われわれから見ての中間（中庸 mesotēs）を保つ選択能力を具えた習性（hexis）である」[22]と規定するのである。

7

互に相手がなくては存在しえない者同志は一緒になるのが必然であり、ここから共同体というものが生まれる。その際役割の違いが関係の違いを生み出し、これらが次第に大きくなり多様化されてついには国家（polis）を形づくる。これはその構成員全体の善をめざしつつ、他のすべての共同体を自分のうちに包括するものであり[23]、「生まれながらにポリスをつくる動物（pokitikon zōon）[24]」としての人間本性に基くものであるとされる。しかもその国家の大きさには動物や植物の場合と同じく、その機能を果すにふさわしい適正の大きさというものがあり、これは人口、国土の両面についてあてはまる。それはいちおう自足的であり、独立であり、ぜいたくでもけちでもない生活程度をもっていなければならぬ。その時国家が最も幸福であるとともに、その成員もまた幸福となる。このことは主体性をもった存在の内外にもつ人間の立派さの活動が最も十全になされることであり、国家としての機能が十分に発揮されることでもある。われわれはここにも「よく生きること（to eu zēn）」[25]を人間の最大の目標としたソクラテス・プラトンの伝統がアリストテレス独自の自然観・生命観の中でまとめられ、うけとめられている実例を見出すことであろう。

その他倫理学においては個人的側面から捉えられたものがここでは共同体の一員としての人間のこととして捉えられている。たとえば倫理学において前述のように捉えられた正義が体制の中ではいかに捉えられる傾向があるかについて彼は「たとえば民主制論者らは平等を正義と考えているが、すべての人の平等が正義なのではなく、平等な人びとに対する平等が正義なのだ。また寡頭制論者らは不平等を正義と考えているが、すべての人の不平等が正義なのではなく、不平等な人びとに対する不平等が正義なのだ。彼らは共に『誰に対して』という点を抜きにして考えているからその判断も間違ったものになる。自分たち自身の利害にかかわる判断をする時、ひとはうまく判断をくだせぬものなのだ、云云」[26]と語っている。アリストテレスの冷静な現実認識とその透徹した分析さらには人間についての洞察をよく表わした一例であるが、このようなところは彼の著作の随所に見出されるのである。

8

いわゆる芸術（poiēsis）というものがプラトンの国家論その他において原理的に斥けられ、その使用についても警戒の目をもって見られていたことは周知の事実であるが[27]、アリストテレスは以上見てきた扱い方の中で芸術に新しい位置を与えた。彼によれば芸術は技術の一つであり、技術はさきにも見たように自然を模倣することにその本質があり、それゆえに自然のもつ目的性・素材性・形相性・動因性をもっている。それゆえに技術さらに芸術も行為とその立派さとを論じた実践哲学に接触するとともに、その必要条件である動因・素材に着目すべきことが諒解される。こうして技術・芸術も人間の本性に立脚し、とりわけ人間の性格が行為の積み重ねによって形成されるものであるところから、たとえば悲劇が「すぐれた人たちの厳粛な行為の描写再現（mimēsis）であって、痛ましさ（ereos）と恐れ（phobos）を通じてそのような感情の浄化（katharsis）を達成して行くものだ[28]」とされている。そしてここに自然のもつ機能とのつながりが見られるが、技術においてはむしろ目的が優先し、その実現手段となるべきものを他の制約の諸要素に即して整備することが中心になるのであって、技術・芸術の目標が生命の完全現実態とつながるものをもっていることに注目させられる。そしてこの媒体としての自然物・言語表現などが人間の自然本性に即して秩序づけられ用いられるところにその理想があるといえるだろう。いずれに

しても技術・芸術の特徴たる制作（poiēsis）が理論（theōria）・実践（praxis）と並んで人間の生命活動の重要な一面であることを見逃すわけにはいかない。

アリストテレスが実際にここで問題にしたのは、伝統的分類によれば、弁論術と創作論であるが、これらを以上のように技術の一種と捉える時、こんにちの工業技術、さらにこれを拡大解釈すれば教育や医療などをもこの分野に入れて考えることができるであろう。こんにち問題になっている技術と倫理の問題は、アリストテレスによれば、その根底に自然と人間、さらに両者に共通する生命という基盤をもっているのであって、問題の正しい解決はそれをこのような根底に立って追求解決するところにあることが示唆されるのである。

9

以上アリストテレスの問題の扱い方を現存著作集（Corpus Aristotelicum）の排列順序にほぼ従ってのべたのであるが、これらを通じて顕著なことはその生物学的むしろ生命論的な存在観とそれに即した問題把握の仕方である。冒頭にものべたように彼は長くプラトンの学校に学んだので、その思想的扱いにはプラトンの影響が生涯深く残っているが、その観察重視や、先行学者の見解への配慮、とりわけその多面的で実際に即した反省吟味の仕方などにはいかにも医者の家系らしい特長が見られる。従来アリストテレスは――西洋中世哲学におけるその伝統もあって――第一義的に哲学者・形而上学者として見られ取扱われて来たことが多く、その科学的探求の側面について軽視さらには無視される傾向が少なくなかった。しかし彼の現在著作の半分以上――ベッカー標準版で約1500ページのうち800ページ――が広義の自然学に属するものである事実を見る時、この事実を抜きにしてアリストテレスの学問体系を語ることはすこぶる片手落ちのものになるのではないかと疑われる。他方また科学史で扱われるアリストテレスの業績については、その論理学・形而上学さらに実践哲学の方面についての評価を抜きにして語られるのが通例であって[29]、これまたアリストテレスの全体像を歪めたものにしている嫌いなしとしない。とはいえこれら二領域を単純に重ね合わせただけではアリストテレスの十分な理解には程遠いのであって、アリストテレスが実在を観察考察した態度に即して、まずこれらをできるだけその動的発展の姿においてとらえ、同時にそのそれぞれの時期における存在観の組織・構造に目くばりすることが大切であると考えられる。現実の存在を運動変化する組織体と捉えたアリストテレスの哲学そのものもまた生長発展する構造体と見るべきであって、これこそ一つの生命をできるだけ完全に捉えようとする彼の態度にふさわしい見方といえるのではないか。

むろんアリストテレスの到達した学的探求の現実は、彼が企図した目標にはなお遠く、その各分野において未解決、観察不十分、さらには少なからぬ誤解を含み、後日の補訂にまつべきものが少なくないことはいうまでもない。そしてそれはいままでに十分過ぎるほど十分に検討され論じられ、アリストテレスといえばもはや過去の知識の遺物とさえ感じられたことが少くなかった。しかしこれはすべての科学の運命であって、こんにちといえども科学はその成果の絶対性を誇ることはできないであろう。アリストテレスの生命の探求も、他の自然探求者同様、従来の伝統的思考に半ば根ざしながら、それの批判的分析を通して、これを時に改変、時に放擲する試みの連続なのである[30]。そしてそこに示された科学的さらに学問的態度はなおわれわれをして考えさせるものがあるのではないか。

10

われわれはこんにち分裂と混迷の時代に住んでいる。世界観の分裂、人間関係の分裂、人間の内面の分裂、そしてアトム論的個人主義の生き方の中にあって、生命の世界を統一する原理の喪失の世界に住んでいる。これらはやがて闘争とニヒリズムを生み出し、その強行解決の手段として強力な外的統制手段を招く怖れさえも生まれている。その思想的根源は遠く近世の出発点にあるとも考えられる。たとえばデカルトは、探求の方法として対象を小部分に分割することを提唱し、思考する個の存在をもってその哲学を始め、人間を二元論的に捉えた。そしてそこから出てくる心身関係の問題解決の原理として、神的存在を唯一完全な実体としたスピノザの一元論および心身を動くモナドという発想のもとに調和させようとしたライプニツの思想をあわせて、近世思想の三原型がその初期において見られる。のちの科学の発達や宗教思想の純化から出てきた啓蒙思想や理想主義のもつ観念的もしくは唯物的一元論は、ある意味においてスピノザの

後裔である。また道徳の座を確保するために科学と調停し、「信に場所を与えるために知を取毀たざるをえなかった（das wissen aufheben zum Glauben Platz zu bekommen）[31]」と語ったカント的思考はライプニツの伝統に立ちつつ一新生面を拓いたものといえる。しかしここに見られるような観念と唯物、道徳と科学、信と知の二大対立は、これが原理化されさらにイデオロギー化される場合には、救いようのない分裂・混迷を引き出すことになる。しかもこのような単純一元論もしくは分析的二元論の思想に支配された科学や哲学、手近かな便利さや能率を目標にした技術によっては、こんにちの精神混迷からの脱出をはかるべくもないというのが現状ではあるまいかと考えられる。われわれがアリストテレスの生命論さらにはその世界探求の態度を顧みようとするのは、まさにこの時点においてなのである。

むろんアリストテレスは2000年以上昔のギリシアの哲学者であり、こんにちの知的精神的状況にそのまま適用されるよしもなく、彼自身にも当時の思想的精神的雰囲気に強力に支配される面があったことも見のがすべくもない。彼にベルクソンの飛躍的生命観（élan vital, élan d'amour）を求めることもできず、またホワイトヘッドの行った過程と実在（process and reality）の分析を求めることもできない。しかし前者の直観主義的方法、後者の数学的物理学的方法が、生きた世界の組織秩序を真に十全に解明説明できるかは依然として問題であろう。このような状況の中でアリストテレスの人間を頂点とする生物学的思考が、単なる直観や厳密科学よりも、生きた存在の形相、こんにちの言葉でいえばパタン認識や[32]、生命を哲学・倫理の地平にまで及ぶ包括的なものととらえる総合的見地のあり方においてなお多くの示唆をあたえるのではないか。小稿はそれへのヒントに着目したひとつのスケッチである。

文　献

1) Metaphysica (以下 Met.), I. 1. 980^{a}21-982^{a}3.
2) Met. IX全体.
3) Categoriae, 1. 1^{a}1-15 その他.
4) ともに元来言語学の用語。F. Saussure: Cours de linguistique genérale, 1916.（小林英夫訳：言語学原論．岩波書店，昭15）などの提唱による。
5) 例、Phaedo, 79A-80B その他。
6) 総論的なものとしては De Anima, Parva Naturalia.
7) De Anima, II, 1. 412^{a}27-28.
8) op-cit. III, 5. 430^{a}10-25.
9) Timaeus, 92C.
10) Physica, II, 1. 192^{b}14.
11) Physica, II, 8. 199^{a}15-17.
12) 例. Physica, II, 8. 199^{a}20-30;De Generatione Animalium, II, 6. 744^{b}16-17; III, 2. 753^{a}6-11; De Partibus Animalium, III, 8. 670^{b}33-671^{a}9; IV, 10. 686^{a}20-24.
13) Met. VII, 17. 1041^{b}7-9.
14) Ethica Nicomachea（以下 E. N.）; Ethica Eudemia; Magna Moralia の三著。
15) Politica; Atheniensium Respublica の二著
16) I, 3. 1094^{b}21-22.
17) I, 6. 1096^{a}23-^{b}35.
18) E. N. I, 6. 1097^{a}13-14.
19) E. N. I, 6. 1098^{a}16.
20) E. N. V, 4.
21) E. N. VIII-IX.
22) E. N. II, 6. 1106^{b}36-1107^{a}2.
23) Politica, I, 1. 1252^{a}4-6.
24) Politica, I, 2. 1253^{a}3.
25) Crito, 48B; Gorgias, 512D 以下.
26) Politica, III, 9. 1280^{a}11-16.
27) Respublica, X. 1-8, 595A-608B; Phaedrus, 259E-274B その他
28) Poetica, 6. 1449^{b}24-28.
29) F. Dannemann: Die Naturwissenschaften in ihrer Entwicklung und ihrem Zusammenhang, Leipzig, 1920-23（安田徳太郎訳：大自然科学史、第1巻 319-403. 東京，三省堂、昭52）; J. L. Heiberg: Naturwissenschaften, Mathematik und Medizin in klassischen Altertum, Leipzig, 1920（平田寛訳：古代科学．74-89. 東京、鹿島出版会、昭45）; B Farrington: Greek Science, London, 1953（出隆訳：ギリシア人の科学、上．167-204. 東京、岩波書店、昭30）
30) G. E. R. Lloyd: Science, Folklore and Ideology, 1, Cambridge, 1983.
31) I. Kant: Kritik der reinen Vernunft, Vorrede zur

zweiten Aufl, 1787 (Akademie 版. Bd. 3. S. 19).
32) M. Grene: A Portrait of Aristotle, 229. London, Faber, 1963.

本文中のアリストテレス引用邦訳は筆者編：アリストテレス、世界の思想家2、東京、平凡社、昭52、によった。なおアリストテレス研究文献は、G. E. R. ロイド著、筆者訳：アリストテレス、その思想の成長と構造、東京、みすず書房、昭56、の巻末にその主要なものをあげておいた。

Abstract

The scope of Aristotle's life theory
—— A sketch ——

Shigeru KAWADA

A distinctive feature of Aristotelian philosophy can be seen in his biological approach. This article at first demonstrates this proposition throughout his theoretical works: his adoption of the pair concepts *dynamis* and *energeia* , attestation of logical framework, comprehensiive presentation of psychic faculties including bodily functions, placement of form and matter as two factors of organic structure, and bio-scientific understanding of the concept *ousia,* etc. In the field of ethics and politics, Aristotle sets out his research from his basic conception of human being, *to zōon logon echōn, to politikon zōon*, and aims at its consummation as *psychēs energeia kat' aretēn* , *to eu zēn*. And other topics in these fields are discussed in view of these start and end. Particularly instructive and relevant for our present state of science and technology is his treatment of *poiēsis* and *poiētikē:* his theory of *katharsis*, for example, suggests the necessity of connective study of humanics and psycho-somatic medicine based upon close scientific research and philosophical insight. This article at the end, proposes the necessity of re-assessment of Aristotle's life theory with reference to the new stage of post-positivistic view of science and philosophy including Bergson and Whitehead.

Departmet of Philosophy and Ethics